

セルフヘルプグループ(SHG)論の批判的検討 —ひきこもりサミットの「当事者研究」を通じて—

東京都立大学 川田八空(009759)

キーワード：セルフヘルプグループ、当事者研究、当事者活動

私の研究テーマに関心を持ってくださりありがとうございます。この研究報告は2017年度の私の学部の卒業論文を基に作成しました。この卒論はインターネット上でPDF形式でダウンロードが可能なので、もしご興味あれば是非ご一読いただけましたらと思います。
http://www.f.waseda.jp/k_okabe/semi-theses/1701yasora_kawata.pdf いろんな立場の人から様々な感想やご意見ご批判を頂けたらとても嬉しく思います。それでは、なにぶんはじめての学会報告ということで至らない点もあるかと思いますが、どうぞよろしく願いいたします。なお本報告において、SHGという概念は「共通の問題を持つ人たちによる、相互援助のためのグループ」(高松 1989: 320)のことを基本的に指すこととします。

まず、研究目的に入る前に本研究で扱う、私が運営者をしていたひきこもりサミットという当事者グループについて説明をしておきたいと思います。ひきこもりサミットは、私がひきこもり経験を持つ友人と音信不通になった際にその友人に対して、「今度、不登校やひきこもりなんかの経験のある友達連中で集まるけど、よかったら一緒にどう？」と誘ったことをきっかけに始まったグループのことです。それでグループ名が「ひきこもりサミット」となった背景についてなんですけど、これにはいろいろ理由はあるのですが、「ひきこもり」と「サミット」という字面のアンバランスさを、ひきこもりサミットの立ち上げメンバーである4名全員が「おもしろい！」と感じたことが一番のポイントだと言えます。綾屋(2017)は、ユーモアやメタファーとは、多数派による既存の固定観念や価値観を把握したうえで、それとは異なる観念や価値観を共有する者同士が、既存の言葉づかいとは少しずつらした表現をすることで生じる、人間関係のつながりを担保にした理解やおかしさだと言えるのではないかとしています。私は立ち上げメンバー達が「ひきこもりサミット」というグループ名を「おもしろい！」と感じた背景には、綾屋が言及しているようなユーモアの存在があるのではないかと考えています。つまり、立ち上げ時のメンバーにおいては既存の固定観念や価値観を把握したうえで、それとは異なる観念や価値観を共有する者同士というつながりの担保があったからこそ、軽いノリで深い考えもなく「ひきこもりサミット」というグループ名を採用したのだと言えます。

当初、ひきこもりサミットは、「自らの経験を踏まえ、毎回のテーマについて各々の立場から意見を述べ、自分たちの経験を多面的に捉えなおし、そこで得られた知識を社会に還元する」ことを目的としたグループとして始まりました。実は「ひきこもり」をキーワードとして集まってきたメンバーにはそれぞれセックスワーカー、不登校、精神障害、虐待サバイバーといった当事者性があり、決して「ひきこもりのグループ」として始まった訳ではない

点を是非押さえておいて頂きたいなと思います。そんな「ひきこもり」を標榜するけど、「ひきこもりのグループ」ではないところで始まったひきこもりサミットは、にもかかわらず、次第に「ひきこもりの SHG」として活動することになっていきグループ運営を積極的に担っていた私は次第に、「SHG を運営していく上での困難さ」(中田 2003: 82)に直面してることになります。ひきこもりサミットという SHG における「運営の困難さ」については、研究の方法のところで詳しく触れたいと思います。以上がひきこもりサミットの概略です。

研究目的

それでは、研究目的に入っていきます。本研究に取り組む上で私には、3つの問題意識がありました。1つ目は、私自身ひきこもりサミットの運営者として「SHG 運営の困難さ」(中田 2003: 82)を覚える機会が増えたのですが、それはなぜだろう？どうすればこれは解消できるのだろうか？というものです。ひょんなことからひきこもりサミットというグループの運営者をするようになった私ですが、調査研究に臨む頃には運営に難しさを覚えることがとても増えていたのです。最初はとても楽しくやっていたのに、その時とは何が違ってしまったのか調べたいと思いました。2つ目は、そもそも従来の SHG 論は過度に「同質性」や「相互扶助」を強調しすぎなのではないか？という問題意識です。近年、「SHG 運営の困難さ」についての事例報告が増えており、社会資源としての SHG を今後も健全に機能させていくための研究がなされているのですが、むしろこのような問題意識に基づいて行われる専門家による SHG 研究こそが、SHG という「現場」に「SHG 運営の困難さ」をもたらしているのではないか？という問題意識が私にはあります。この問いは、ひきこもりサミットという個別のグループで起きた問題を多くの SHG が「SHG 運営の困難さ」を抱えているという社会的状況と関連付けて「研究」するための問いにもなっています。3つ目は、「SHG 運営の困難さ」は、従来 SHG の専門家によってその解決方法が研究されてきましたが、「当事者研究」を用いて各グループでそれぞれ取り組む方が解決方法としてより望ましいのではないか？というものです。「自分たちの問題」を自分たちだけでは解決できず、専門家に提示された解決方法でその解決を図るという経験はそれ自体がディスエンパワメントになりうると思われれます。そうではなく、グループ内で解決する方法として「当事者研究」を用いるのはアリなのではないかと考え、このような問いを立てました。

このような問題意識があって立てられた研究の目的がポスターにもある次の4点です。1つ目は、私が運営していたひきこもりサミットで生じた「SHG 運営の困難さ」という個別の問題から文献研究と「当事者研究」を通じて、従来の SHG 論に対して批判を加えることです。「個人的なことは政治的なこと」ではありませんが、私の運営者としての経験は他の多くの運営者においても起こりうる問題だと考え、個別のケースから普遍的な問題を導き出し、その問題点を批判することを目的としました。2つ目は、文献研究を通して、専門家による SHG 研究によって多くの SHG と呼ばれる当事者グループにおいてその活動に閉塞感が生じている可能性を明らかにすることです。このような言及は従来の SHG 論の蓄積の

中には見当たらず、そういった側面を当事者目線で指摘できれば価値があると考えました。3つ目は、私が所属するひきこもりサミットの「当事者研究」から導き出された「SHG 運営の困難さ」の解決方法や「当事者研究」実践の様子の発信を通して、従来の SHG 概念に絡めとられている他の当事者グループに対するエンパワーメントを行うことです。これは先の問題意識とも通じますね。専門家発信の「SHG 運営の困難さ」ではなく、当事者発信のそれを提示し、しかもその「当事者研究」の様子を伝えることができれば、多くのグループ運営者をエンパワーメントできるのではないかと考えました。そして最後に、そのためにも、SHG という「現場」の足かせとなっている従来の SHG 概念を刷新するような新しい概念を提出することを目的として掲げました。私は、「SHG 運営の困難さ」という現象は、考察でも確認する SHG 論構築・再生産の循環図モデルで表せていると考えています。それは裏を返せば、このモデルに留まる限りにおいて、多くの SHG とされる当事者グループは運営の困難に直面しやすいということです。そのため、このようなモデルや言説を脱構築・書き換える、或いは突破していく実践が必要だろうと考えています。以上、研究目的でした。

研究の視点および方法

ではまず、研究の視点についてです。テーマや私の SHG 運営者という立場からも明らかに、本研究はひきこもりサミットという SHG の運営者をしてきた調査者によってなされた「当事者研究」だと言えるでしょう。そのため、SHG 運営者という当事者性に基づいた研究の視点をとっています。ちなみに半澤(2001)によると、従来の SHG 研究において当事者によってなされたものは1割にも満たないとされています。私は SHG 論という領域は当事者性に基づいた「研究」がもっと積極的になされるべき領域だと考えています。本研究の新しさと意義は、従来専門家主導でなされてきた SHG 研究の中に当事者発信の「SHG 運営の困難さ」の解決方法を提出した点にあると言えると思っています。

続いて、研究の方法に入る前にひきこもりサミットの「運営の困難さ」について確認しておきましょう。卒業論文の予備研究の成果として川田(2017)は、ひきこもりサミットの「運営の困難さ」が生じた要因として以下の4点を挙げています。1つ目は、グループが持つ「場の力」に対する過信。2つ目は、グループ名が持つ「逆機能」。3つ目は、居場所機能の特化という「組織化」。4つ目は、運営者が私1人しかいなかったこと、です。これらの要因は、次のようにまとめることができます。まず、「場の力」に対する過信のために、立ち上げメンバーは、しんどい状態にある人でも特に考えもなくグループに受け入れていきました。それに伴い、「ひきこもりサミット」というグループ名のユーモアを共有しないメンバーが増え、ひきこもりサミットを「ひきこもりのグループ」と誤解するメンバーが増加したのです。そのようなグループの変質から、運営者であった私自身も知らず知らずのうちに声の大きいしんどい状態の人のニーズに応える形で、居場所機能の特化に向けた「組織化」を推進していきました。この「組織化」によって、ひきこもりサミットは本格的に「SHG 化」し、

「ひきこもりの SHG」となったのです。そして、ひきこもりサミットの SHG 運営に奔走する私は次第に疲弊していきました。このような経緯を経て、私はグループの中心にいながらにしてグループ内で“孤立感”を深め、運営者としてバーンアウトしていったのです。

次に研究の方法について説明します。本研究では文献研究と「当事者研究」を用います。「当事者研究」はフォーカス・グループ・ディスカッションを用いて行いました。FGD とは、「あらかじめ選定された研究関心のテーマについて焦点が定まった議論をしてもらう目的のために、明確に定義された母集団から少人数の対象者を集めて行うディスカッション」(千年・阿部 2000:57-58)のことです。調査対象者は私自身を含む、ひきこもりサミットのメンバー4名としました。実施時期と時間については、2017年7月15日に90分、2017年8月27日60分の2回です。この際、ファシリテーターは私が務めました。調査における質問項目は以下の3つとしました。①ひきこもりサミットにおける「運営の困難さ」はどんなものだったと思うか。②調査者が「運営の困難さ」に直面していた当時のひきこもりサミットの雰囲気についてどう思うか、③ひきこもりサミットの「運営の困難さ」をグループとして解決するには、具体的にどうすればいいと思うか。これらの質問を私からメンバーに問いかけることで、私がグループの運営者として「運営の困難さ」を感じるようになっていった背景をメンバーと共に考え、その解決策を練り出すことを企図しました。また、これらの質問を通してメンバーと共に従来の SHG 論に基づいて組織されるグループとひきこもりサミットが本来持っていた目的との差異を際立たせ、考察することを狙いました。

倫理的配慮

倫理的配慮についてです。本研究を実施した当時、私が所属していた大学には研究倫理審査は存在しませんでした。しかし、調査対象者には研究目的・調査方法・個人情報保護・発表の方法について文章と口頭で説明しています。また、インタビューを行う際にも IC レコーダーで録音することについて許可を取り、文字起こしたデータについても確認を取り、その確認をしてもらったデータを論文中で用いました。また、学会報告に際して改めてデータの利用に関する承認を得ています。以上から本研究は、「一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理規程」と「日本社会福祉学会研究倫理規程にもとづく研究ガイドライン」を遵守して行ったと言えるでしょう。

研究結果・考察

それではいよいよ研究結果について報告していきたいと思います。まずは、文献研究結果をみましょう。従来の SHG 論によれば例えば岡(1985)は、「治療的機能」と「社会的機能」の2つの機能を同時に持った「両向性」を有する当事者グループこそが SHG であるとししました。これによって、SHG とは、メンバー間の回復機能と、既存の支援や治療システムや社会一般を変革するような機能を発揮するグループのこととされた訳です。あるいは中田(2015: 62)は、「SHG の範囲をどのように限定するかは、未だ明確ではない」が、プロシユ

一マナーモデル的な観点から、「援助の提供者を拡大するという点では SHG の範囲を広く捉える方が援助形態として有効である」としています。このように専門家は従来、その客観的な視座から SHG の概念規定を行い、一方的にどのような当事者グループが社会資源としての SHG であるかを価値判断し、社会的に有益な援助形態として機能している当事者グループを特に SHG と見なしてきたと言えるでしょう。このような専門家の言説は枚挙に暇がありません。しかし、いずれの言説も当事者の持つ「力」を専門家の考える SHG 概念に沿う形で発揮するように暗に仕向けてきたと言えます。三好(2015: 52)は、従来専門家は、SHG を「なぜ同じ問題を抱える人々が集うことで回復していくのか」という興味・関心に基づいて「研究」してきたとしています。あるいは、このような問いに基づいて専門家が行ってきた「研究」が生み出してきた SHG に関する言説に多くの当事者グループが絡めとられ、「変に組織化」が進んだ結果、現在、多くの SHG が「SHG 運営の困難さ」という事態に直面しているのではないのでしょうか？

このような文献研究の知見を踏まえて、私は以下のような結論を導き出しました。それはすなわち、当事者グループのことを「SHG」と名づけた者には、あくまで、当事者グループが「社会資源」として機能していくことに対する期待があるということです。「社会的機能」と「治療的機能」の「両向性」を有する「SHG の像」に合致するふるまいを当然のこととして期待し要求する暗黙の視線、これこそ「SHG」という表現の現実的な意味だと思われまます。援助資源の社会的不足に悩む専門家は、「SHG」を貴重な「回復資源」とみなし、はれものに触るように協働関係を築いてきたと言えます。けどそれは、当事者グループが「社会資源」として機能する「十分に発展した SHG」(岡ほか 2011: 169)である限りにおいてだったのです。だからこそ近年、専門家はその「社会的期待」に応えられなくなってきた「社会資源」として機能しえない、運営に困難を抱える「SHG」を問題視し、その解決方法を「研究」するようになったのでしょう。つまり、「SHG 運営の困難さ」とは、「社会資源」として機能することを期待され「SHG」と名づけられた当事者グループにおいて、あくまで運営者が「社会的期待」に応えようとしていく過程で生じる、「社会的問題」に他ならないのです。ここで1つ注目しておきたいのは、SHG 運営者が「社会的期待」に応えようとするのは、彼が社会との折り合いに躓き、失敗した経験をもつ当事者であり、そのような当事者にとって「社会的期待」に応えることで得られる「社会的承認」は喉から手が出るほど欲しいものだからです。私はこのように当事者を「社会的承認」へと駆り立てる構造を持つ従来の SHG 論は“罪”だと考えています。このような理論は、当事者を「社会的承認」へと水路付け、「自分自身を生きること」を奨励しないからです。

そもそも、私は従来の SHG 論で「社会的機能」の代表格とされている青い芝の会にしても、「治療的機能」の代表格とされている AA にしても、最初から「社会的成果」を意識して活動を行っていた訳ではないのではないかと考えています。まさに、「自分自身を生きたい！」という強い意志に基づいて行われる「自分たちのための」セルフヘルプ活動が結実した姿を、専門家が客観的な視座から「社会的成果」として観察したに過ぎないのではないかと

と思っています。セルフヘルプ活動の結実とは、青い芝の会であれば地域での自立生活を可能とする制度の獲得、AAであればアルコール依存症からの回復などに当たります。特定の問題状況を生きてきた当事者や当事者グループが「社会的成果」を挙げた姿の観察を通して、「共通の問題を持つ人たちによる、相互援助のためのグループ」は、社会資源として機能するのだと一般化し、普遍的な定義をすることは暴論だと私は考えます。なぜなら、社会との折り合いに躓いてきた当事者にはそれぞれに、自らが生きてきた固有の文脈があって、持つ「力」にも厳然として差が存在するからです。当然、躓いた問題の性質によって置かされている社会的状況もまったく異なるはずで、現にこの社会に生きる当事者の文脈をまったく無視して、一方的に当事者の持つ「力」に期待をし、当事者グループに対しては「SHGの像」を押し付ける人びとの姿勢は、やはり“罪”だと思うのです。

次に、ひきこもりサミットの「当事者研究」を通じて得られた知見に基づいて、私がひきこもりサミット内で感じていた「運営の困難さ」と“孤立感”の解決方法を提示したいと思います。1つ目は、「変に組織化」することなく、“素朴な感情”を大事に、活動していくことです。2つ目は、私も運営者ではなく、ひとりのメンバーとして活動を楽しむことです。この2つの知恵をグループ内で共有し実践することで、まず私が感じていた「運営の困難さ」と“孤立感”は解消されました。なにより、ひきこもりサミットがSHG論を通して生み出されてきた言説に絡めとられない「自分たちの」「自分たちによる」「自分たちのための」グループ(岩田 2008: 16)として、当事者活動を展開することを可能とします。このような当事者グループのあり方は、SHG論をはじめとする当事者活動の「研究」を通して生まれる様々な「価値」にも振り回されず、絡めとられぬよう“素朴な感情”を大事にあくまで「自分たちのための」活動をし続けるという一種の抵抗だと言えます。ひきこもりサミットは、どんな「価値」よりも、現にグループに所属する自分たちがワクワクするような楽しい活動を続けていくことがなによりも重要だと考えています。

※紙幅の関係で「当事者研究」の実践の様子は割愛しましたが、卒論では詳述しているのでご興味のある方は、是非私の卒論を読んで頂けたらと思います。

考察に入っていきます。本報告の肝でもある、図1のSHG論構築・再生産の循環図モデルについて確認します。この循環図は私の「研究」を踏まえて、どのようにSHG論というものが構築されてきたのか、そしてそれがSHGという「現場」や運営者らに対してどのように機能してきたのかを示すモデルとして作成されました。まず①ですね。SHG論が構築されるにあたり、AAや青い芝の会といった、共通の問題を持つ当事者によって組織された当事者グループが「社会的成果」を挙げたとして「発見」されることから始まります。こうしたモデルケースがないことには、理論化ははじまりません。次に②基本的に、SHGは専門家らによって「価値」あるものとして権威づけられ、社会的承認を得る、です。日本にSHG概念が輸入された当初、多くの専門家が「SHGの援助の有効性についてはまだまだ批

判的」(中田 2003: 75)であり、SHGのことを「非専門的ないし「しろうとの」な援助形態」(久保 1981: 254)と見なしていました。しかし、一部の「理解ある先進的な専門家」によって、その意義や機能が紹介されるにつれて、見方が変化していき「承認」されるようになっていった経緯があります。③は専門家が客観的な視座からSHGの機能や意義を「研究」し、「語ることのできる主体」となった一部の当事者がSHGでの経験に立脚した回復体験記を著す段階です。このような段階を経て、④にもあるようにSHGは「回復の場」という認識が広まり、SHGに「治療的機能」を求める利用者のしんどい状態の当事者が押し寄せるようになるのです。そして、⑤SHGという社会資源に寄りかかろうとするしんどい状態の人が増加し、SHGは実質的に「支援の現場」と化すのです。その為、運営者のバーンアウトが増加するようになるのだと考えられます。従来のSHG論を築いてきた専門家たちはSHG周辺で自分たちが紡いできた言説に対して無頓着だったと言わざるを得ないでしょう。例えば岡(2002)は、現状、SHGの参加者は熱心なリーダーと受動的な会員の「会員二極化状態」にあり、自分たちのニーズを充足することを求めてSHGに入るフリーライダー的な参加者のために、SHG運営におけるリーダーたちの負担がとて大きくなっていると指摘していますが、岡をはじめとする専門家たちの言説がSHGを「支援の現場」にしていった可能性については省みることはありません。最後に⑥です。「SHG運営の困難さ」が多数報告される中、「社会的成果」を挙げるグループは「発見」され続け、社会資源として機能させ続ける為の研究は増加します。つまり、SHG論はどんなに多くの当事者グループが「SHG運営の困難さ」に直面しようともその解決方法を専門家が「研究」することを通して維持されるのです。あるいは、そのような「研究」の増加とともに、「SHGの像」と合致する当事者グループが「発見」され続け、SHG論は再生産され続けるということです。岡ら(2011)による論文では、岡は今後の活動方針などについて相談に来た自死遺族の会の人たちに対し当初は「自分の専門はSHG論」だからという理由で相手にしないつもりでいたのですが、話を聞いていくうちに、自死遺族の会が「SHGの像」に合致する当事者グループとして「発見」されていく様子が描かれていると言えます。このような「研究」実践を通して、今後も多くの「SHG運営の困難さ」に直面する運営者にとって抑圧的に機能しうるSHG論は再生産され続けるのではないかと思われれます。最後にこのような循環を解体するための手立ての1つとして、新しいSHG概念の提出を以て、本報告を終わりたいと思います。

最後に文献研究と「当事者研究」から導き出された新しいSHG概念について確認します。三好(2015: 55-56)は、「日本ではSHGとは何かというと、「治療的機能」を指向するグループを指してきた」としています。しかしSHGとは、本当にその端緒から、「仲間同士が支え合うグループ」(久保 1998: 3)として活動する援助形態だったのでしょうか。私は、このようなSHG観は、客観的な視座を有するとされる専門家が、SHGを「なぜ同じ問題を抱える人々が集うことで回復していくのか」という興味・関心に基づいて長年「研究」し、専門的知識と比較することを通して確立してきた1つの捉え方に過ぎないと考えています。

そもそも SHG を立ち上げる際、共通の問題をもつ当事者であることは本当にそんなに重要なのでしょうか。SHG という空間で本当に重要なのは、その空間を同じ問題を抱える当事者で構成することなどではなく、ある人が自分の抱える切実な問題を語っても、「治療のコミュニケーション空間」(石原 2013: 18)に囲い込まれることなく、むしろ語ることを通して、自分が「誰」(Hannah Arendt 1994=1958)であるかを他者に対して明らかにすることができるような空間、すなわちハンナ・アーレントの言う「現われの空間」のような空間として機能することにあるのではないのでしょうか。私は、SHG とは本来ハンナ・アーレントが述べている「現われの空間」のような空間を志向するグループだったのではないかと考えています。アーレント(1994=1958)と齋藤(2000)によれば、「「現われの空間」とは、他者を「何」の位相で眼差すことをやめ、他者に対する予期を諦め、他者を自由な存在者として処遇し、お互いの行為と言葉によって私が他人の眼に現われ、他人が私の眼に現われる、ある種の劇場的な空間であると言えるだろう」とまとめることができます。社会との折り合いに躓き、あるいは失敗し、「自分自身を生きること」が難しかった当事者にとって、他者の前に「現われ」、自分の外形をはっきりと示すことができる「現われの空間」は、「表象の空間」とは異なり自分の経験を偽る必要がなく、それゆえ「自分自身を生きること」を可能にする空間だと言える。なにより、「現われの空間」は創成し、共有する者に“ワクワク感”や“楽しさ”をもたらすと思われまます。

以上のように SHG 概念を問い返した時、従来のセルフヘルプ概念も捉え直す必要があると思います。岩田(2008: 54)は、「セルフヘルプとは、自分を助け、さらに、お互いに助け合い、仲間になることです」としていますが、このようなセルフヘルプの捉え方も客観的な視座を有するとされる専門家が、その興味・関心に基づいて導き出した 1 つの捉え方に過ぎないのではないのでしょうか。セルフヘルプ概念を捉える際には、客観的に観察可能な当事者間でなされる営みや行為より、当事者の内発的な感情や思いにこそ焦点を当てるべきなのではないのでしょうか。私は、人が「現われ」、「自分自身を生きること」を可能にする「現われの空間」のような空間を志向する SHG において、セルフヘルプとは以下のような概念として捉え直されるべきだと考えています。すなわち、セルフヘルプとは、なによりもまず、個人が有する「自分自身を生きたい！」という強い意志であるということです。つまり、セルフヘルプとは、あらゆる病や障害、あるいは既存の価値観、他者との関係に支配・搾取されることのないよう、それらによる抑圧下に晒されながらも、それらによって自分を損なわれないよう、いかなる状況でも「自分自身を生きたい！」と強く願う、意志そのものなのであり、セルフヘルプ活動とは、そのような意志に基づいてなされる諸実践のことであるということです。このセルフヘルプの定義から SHG とは、「現われの空間」のような空間の創成と共有を志す、「自分自身を生きたい！」という強い意志を持つ当事者で集まり、「自分自身を生きる」ための諸実践を行うグループのことであると言えると思います。

以上が文献研究とひきこもりサミットの「当事者研究」から導き出された新しい SHG 概念でした。このように、「当事者研究」を通じて新しい SHG 概念を発信することで既存の

SHG 概念を揺さぶることができると思います。また、私以外の SHG 運営者がそれぞれの「当事者研究」などの実践から新しい SHG 概念を提出する実践が増えて行けば、SHG 論はもっと流動的なものになっていくのではないかと考えています。

最後に繰り返しにはなりますが、本報告は私が早稲田大学において提出した卒論を改稿したものとなっています。参考文献については以下の通りです。ここまでご清聴(清読?)頂きありがとうございます。ご興味持っていただいた方は是非、卒論に直に触れて頂ければとても嬉しく思います！これにて本報告を終わりにします。

http://www.f.waseda.jp/k_okabe/semi-theses/1701yasora_kawata.pdf

参考・引用文献

- 綾屋紗月, 2017, 「当事者研究をはじめよう！—当事者研究のやり方研究」熊谷晋一郎編著『臨床心理学増刊第9号—みんなの当事者研究』金剛出版
- 石原孝二, 2013, 「当事者研究とは何か—その理念と展開」石原孝二編著『当事者研究の研究』医学書院
- 岩田泰夫, 2008, 『セルフヘルプグループへの招待—患者会や家族会の進め方ガイドブック』川島書店
- 岩間文雄, 1998, 「セルフヘルプグループへの支援—専門職が担うことのできる役割とは何か」『ソーシャルワーク研究』23(4). 285-290.
- 岡知史, 1985, 「セルフ・ヘルプ・グループ (SHG) の機能について—その社会的機能と治療的機能の相互関係」『大阪市立大学社会福祉研究会研究紀要』4. 73-93.
- , 2002, 「仲間意識と会員意識の乖離—SHG の「会員二極化」仮説」日本社会福祉学会第50回記念大会発表原稿
- 岡知史・Thomasina Borkman, 2011, 「セルフヘルプグループとセルフヘルプ・サポーター、そしてソーシャルワーク」『ソーシャルワーク研究』37(3). 168-183.
- 川田八空, 2017, 「ひきこもりサミットの変遷にみる「運営の困難性」—セルフヘルプグループにおける世話人の立場性を問う」学部生レポート
- , 2018, 「セルフヘルプグループ(SHG)論の批判的検討—ひきこもりサミットの「当事者研究」を通じて」学部卒業論文
- 久保紘章, 1981, 「セルフ・ヘルプ・グループについて」『ソーシャルワーク研究』6(4). 250-256.
- , 1998, 「セルフヘルプ・グループとは何か」久保紘章・石川到覚編著『セルフヘルプ・グループの理論と展開—わが国の実践をふまえて』中央法規出版
- 齋藤純一, 2000, 『公共性』岩波書店
- 千年よしみ・阿部彩, 2000, 「フォーカス・グループ・ディスカッションの手法と課題：ケーススタディを通じて」『人口問題研究』56(3). 56-69.
- 高松里, 1989, 「セルフ・ヘルプ・グループ—その概要と心理臨床家の関わり」『心理臨床』

2(4). 319-324.

中田智恵海, 2003, 「セルフヘルプグループ運営上の課題とセルフヘルプ支援センターの役割」『社会福祉実践理論研究』12. 75-85.

———, 2015, 「セルフヘルプ支援センターの課題と可能性」『佛教大学社会福祉学部論集』11.61-78.

半澤節子, 2001, 『当事者に学ぶ—精神障害者のセルフヘルプ - グループと専門職の支援』やどかり出版

見田宗介, 2008, 『まなざしの地獄—尽きなく生きることの社会学』河出書房新社

三好真人, 2015, 「日本におけるセルフヘルプ・グループへの期待と問題の現状」『文学研究論集』42. 51-69.

Hannah Arendt, 1958, "The Human condition", Chicago University Press. (=1994 志水速雄訳『人間の条件』ちくま学芸文庫.)

図・表

図1 SHG 論構築・再生産の循環図モデル

